



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099(226)5100 振込口座 02030-2-8359 編集発行 教区広報部 1部60円年間千共1100円



年頭教書

ともに暮らす家を大切にしましょう

鹿兒島教区 教区長 郡山健次郎

教区の皆さん、新年あけましておめでとうございます。新しい年をどのように迎えたのでしょうか。こうして教区報で新年の挨拶をするのも十一回目になりました。

貧しい者の教会

昨年初めて参加したスリランカでのアジア司教協議会総会のテーマは「いつくしみの使命を生きる貧しい者の家庭教会」でした。「貧しい者の教会」と聞く、豊かな人が排除されていくような印象があるかもしれません。また、「貧しい！」と上から見下す感じがするかもしれません。そうではなく、物質的に貧しくても、また特別不自由を感じない豊かさの中にあっても、教会のみんなが、物質的な価値にとらわれることなく、福音的貧しさの精



神で生きようとする教会の姿を指しています。

福音的貧しさとは、すべては神さまからの頂き物だということに教会の誰もが分かっている、神さまの前では、誰もが小さく罪深いものであり、神さまに頼ることなしには生きていけない存在であることを素直に認めるということです。そんな心で生きていく人々の集まりを「貧しい者の教会」と呼びます。

東の間文化

会議に参加して気がついたことは、アジアの教会が直面していることは、日本の私たちが直面している問題とまったく同じであるということです。先ず、フィリピンや一部の国を除いて、カトリック信者は少数派で、そのため異宗婚が多く、一人信者の家庭が日本でも多いのは周知のとおりです。そんな私たちに世俗化、物質主義、消費主義、絶対的なものを認めようという絶対主義が立ち上がり、いつしか私たちが自身にも似た静観主義に陥って

いる感じがしなくてもありません。そんな風に、今どきの考え方に馴らされていく状態を、アジアの司教たちは「イデオロギー植民地主義」と呼びました。そういえば、知らず知らずのうちに、福音の価値観を置き去りにするほど「東の間文化」(教皇フランシスコ)に絡めとられていくように思います。教会の内にも外にも広がる世俗化や消費主義という「東の間文化」が、結局は信仰に対する無関心を生み、「使い捨て文化」を容認する結果を招いていると言えるでしょう。

ラウダート・シ

そんな現実を直視した文書が出ました。教皇の回勅「ラウダート・シ」ともに暮らす家を大切に」です。私は、皆さんが、フランシスコ教皇の回勅「ラウダート・シ」を読んでくださることを強く勧めます。大変読みやすいものです。そして、現実の生活に具体的な示唆を与えてくれます。「環境回勅」と言われるほど身近な問題を取り扱っています。エコロジーと言え

たいと思います。そうすることで、「東の間の文化」にも暮らす家を大切にしようという教皇の呼びかけに一家をあげて応えることができるでしょう。

それでもネット宣教

インターネットの普及は多くの良いことをもたらしましたが、一方で個人主義の高まりと相まって家族のきずなを弱めている、とアジアの司教たちは指摘しました。家族がそろって食卓に着くことがもはや難しくなった日本の状況はアジアの国にも蔓延しているように思いました。「食事の時でも子供たちはスマホで忙しい」と嘆いている報告が印象的でした。

聖体に生かされる家庭

洗礼を受けた人が一人でもいたらその家庭は聖体によつて養われることを心に留めて欲しいと思います。主日のミサでいただくご聖体のイエスは日々の生活の中で、喜びや苦しみの時も私たちの内に留まり愛してくださる三位一体の神であることを忘れてはなりません。

ミサの中で是非して欲しいことがあります。先ず、一人だけが信者の場合は家庭の全員を三位一体の神との交わりに招き、パンとぶどう酒とともにその人々の聖変化を祈って奉獻します。一人住まいの信者は、離れて暮らす身内はもちろん、お隣、ご近所、毎日顔を合わせる人々を捧げます。こうして、たとえ一人住まいでもミサの中で多くの人々を招くことでイエス様に結ばれた大きな家庭を築くことになり得ます。全員信者であれば、家族のありのままの姿を奉獻し、それだけの必要が満たされ感謝と賛美を捧げる聖なる家族となれるよう祈ります。

今年も教区の皆さんが神さまから頂いた「この体」をいたわり、何よりも「この信仰」に感謝しながら「貧しい者の家庭教会」として希望の日々を過ごされるよう祈ります。

2017年 恵み豊かな一年でありますように！

司教 郡山健次郎
総代理 泉 浩二

【本土地区】

- 末吉卓也・朴鎮亮(始良教会)、寝占敦之(指宿教会)、ステイブ(加世田教会)、泉浩二(鴨池教会)、竹山昭・アン・朴昶奎(ザビエル教会)、頭島光・ムイベルガ・ボスコ(谷山教会)、栃尾泰英(種子島教会)、小隈憲士(玉里教会)、鈴木康由(紫原教会)、鄭法鐘(吉野教会)、宋診旭(鹿屋教会)、丸野六雄(垂水教

- 会)、サンタマリア(国分教会)、ペルナルデイノ(志布志教会)、末吉卓也(溝辺教会)、牧山田一(阿久根教会)、萩原義幸(出水教会)、ハンマ(入来教会)、アッシュャー(大口教会)、大松正弘(川内教会)、山口好信(ラサール学園)、関根悦雄(純心聖母会)、坂本進(本部)

【出向】

- 中野裕明(日本カトリック神学院)、小川靖忠(心のともしび運動本部)、浜崎真実(横浜教区)

【大島地区】

- 内野洋平(大笠利教会)、松永正男(古仁屋教会)、ティエン(小宿教会)、タム(大熊教会)、永山幸弘

【引退】

- 田原 章、田邊 徹、松森孝郎、成相 明人

【敬称略】

記念祭に新しい息吹

地域と共に歩むシドゥッチ上陸記念祭へ

「キリシタン時代最後の宣教師」とも言われるジョバンニ・パチスタ・シドゥッチ神父の屋久島上陸を記念し、その強い遺志に学ぼうとする「シドゥッチ神父屋久島上陸記念祭」が2016年11月23日、屋久島町小島の「神父シドゥッチ上陸記念碑前」で開かれた。同年の記念祭は、2014年にキリシタン屋敷跡から発掘された遺骨が昨年4月、DNA鑑定の結果、シドゥッチ神父のものだと確定されたことから注目を浴び、これまでになく関心の高さのうかがわれるものとなった。

1708年、キリシタン禁教令の中、日本での宣教のために屋久島に上陸したシドゥッチ神父の偉業を称え、町制施行20周年を記念して屋久島町（旧屋久町）が上陸地を見渡せる小島に「神父シドゥッチ上陸記念碑」を建立したのは1980年のこと。その後、町では1983年に第一回「シドゥッチ祭」を開催し、2015年に鹿兒島教区にその主催を譲渡するまで、町主催の記念祭として開催し続けてきた。

屋久島教会を担当する栃尾泰英神父（種子島教会主任）にとつて初めてのシドゥッチ祭。栃尾神父は、小島地区住人の力を借り、教会裏の雑木林を伐採し整備、教会敷地内からもシドゥッチ神父上陸の地が見渡せるようにした。実はこの作業、8月に神父1人で始めたものらしいが、その働きぶりに感心した地区の男性たちが手を貸すようになって実現したものという。その甲斐あって密林のようになつていた教会周囲は、キャンプができるほどに整えられ、また「地域に教会と記念祭が受け入れられている」雰囲気が出てきた。



上陸記念碑前で記念撮影

午後2時から上陸記念碑前で始まった式典には、シドゥッチ神父に対する関心の高まりから、教区内はもとより、福岡、西千葉、八王子の各教会から、また遺骨の発掘された文京区からも参列者があるなど80人余りで賑

わつた。

式典では、まず塩川文博屋久島町教育委員長が挨拶。シドゥッチ神父については「屋久島ジュニア検定」にも出題されていること、町の文化祭においても小学生が発表しているなどを紹介し、「今後はシドゥッチ神父のことを町民の郷土の学びの機会とし、文京区の教育委員会やカトリック教会と協力し、屋久島の財産としたい」と語り、小島地区の岩川修一地区長は、「シドゥッチ神父のことはまだまだ認識度が低いと思う。だが栃尾神父と協力できることを惜しまず、この記念祭を盛り上げていきたい」と語った。

その後、挨拶した郡山司教は、永年、記念祭を続けてくれた屋久島町に謝辞を述べた後、日本の信者たちのために死を覚悟して上陸したシドゥッチ神父の神への信頼の強さを紹介し、またその後の新井白石との交流が日本の開国へのうねりとなつたことから、「シドゥッチ神父を学び、顕彰していくことが、屋久島はもろろん鹿兒島、そして日本の新しい一歩となるきっかけとなるよう祈りたい」と記念祭の意義を語った。

その後は講話があり、フランススコ会のマリオ・カンドゥッチ神父が自分の研究からシドゥッチ神父の誰からも尊敬された人となりを紹介した。講話の後は、ミサがさげられ、その後は小島地区公民館で屋久島在住の作家・古居智子さんによる「遺骨調査とDNA鑑定」に関する解説があり、大勢の参列者が興味深くシドゥッチ神父の骨であるとの確定

に至る経緯について学んだ。古居さんは「その遺骨から顔の復元もできた。もし3Dプリンターのない数年前に遺骨が出ていたら、顔の復元は不可能だった。また遺骨の発見が3年遅れていたら、もうDNAを採取することはできなかったらしい。シドゥッチ神父没後300年での遺骨の発見は

撰理的だと思う」と語り、また屋久島教会の整備された土地に「シドゥッチ神父記念館」を建てたいとの夢を語った。その後は、交流会が開かれ、各地から駆けつけた信者や地元の人たちが温かい交流のひと時を持ち、記念祭の盛り上げを誓った。

私の永年の夢だった屋久島の巡礼が、11月23、24日に実現できたことは、大きな恵みでした。神様と鹿兒島教区の皆様に感謝の思いでいっぱいです。また、その際に屋久島教会の担当司祭の栃尾神父様からシドゥッチ神父様の上陸記念講演を依頼されたことは思いがけないことでしたし、本当に光栄に思っています。屋久島を深く愛したもう一人のイタリア人宣教師のコンタリーニ師が建てた綺麗な御聖堂でお祈りした時に、神様の慈しみを感じ

私の屋久島巡礼

シドゥッチ神父の上陸地を訪ねて

フランシスコ会司祭 M・カンドゥッチ

二つの島（シチリアと屋久島）をついに結んだと感じました。そして、町が素晴らしい記念碑を建てた後、広い土地を鹿兒島教区に寄付したことも感心いたしました。今回、良い天気にも恵まれ、野外で海を見ながらよく準備された式典と荘厳なミサが行われました。郡山司祭の指導力と栃尾神父様の力強い働きは、本当に頼もしい限りでした。このお二人から聞いた話ですが、町の主導で何十回も行われてきた記念祭が2015年から鹿兒島教区に引き継がれたとのことでした。この話を聞いた時、私は神様の御撰理だと感じました。なぜなら、文

京区の教育委員会によってシドゥッチ神父様と受洗者の長介とハルの遺骨が元キリシタン屋敷で発見され、最新の科学的調査によって本人たちのものであると確定されました。このニュースは、マスメディアを通して世界中に広がり、大きな話題となりました。いよいよお骨は文京区から、東京教区に渡されます。その一部は当然、パレルモ教区やイタリアのシドゥッチ家の子孫、屋久島教会に分骨されるでしょう。屋久島で教会の近くにシドゥッチ記念館を造りたいという話を聞いて感心しました。なぜなら、地元作家である古居智子さんとアメリカ国籍の旦那様が積極的に実行に乗り出しているのを見たからです。驚きと同時に頼もしさを感じました。屋久島はきっと素晴らしい巡礼地となることでしょう。



じました。シドゥッチの宣教師が鎖国という厳しい状況にも関わらず、

+ KABAYAN SEKSYON +
Pagiging Mahabagin, Kumikilos Nang May Habag

Sa mga mensahe para sa Kuwaresma, nagbibigay si Papa Francisco ng pampalakas-loob: "Sa panahong ito ng Kuwaresma ang buong Simbahan nawa'y maging handa magpatotoo sa mga taong dumaranas ng materyal, moral at spiritual na paghihikahos, sa mensahe ng Ebanghelyo tungkol sa mahabagang pag-ibig ng Diyos Ama, na handang yumakap sa lahat kay Kristo. Magagawa natin ito sa tuwing tinutulan natin si Kristo na naging dukha at pinagyanan tayo sa kanyang karukhaan."

"Ang Kuwaresma ay isang panahong angkop sa pagtanggap sa sarili; makakabuting itanong natin sa ating sarili kung anong mga bagay ang maari nating talikdan upang makatulong at mapagaan natin ang buhay ng ibang tao sa pamamagitan ng ating karukhaan. Huwag nating kalimutan na ang tunay na karukhaan ay may kakambal na sakit: walang tunay na pagtanggap sa sarili kung walang pagsisisi. Hindi ako nagtitiwala sa kawanggawa na walang halaga at walang nararamdamang sakit."

"Nawa ang Espiritu Santo, na sa pamamagitan niya lahat din ay mga dukha kami na pinayayanan ang marami; walang-wala kami ngunit taglay ang lahat" (2 Cor 6:10), ay patatagin tayo sa ating mga mabubuting hangarin at dagdagan an gating malasakit at pagiging responsible ukol sa paghihikahos ng tao, upang tayo'y maging mga mahabagin at kumilos nang may habag." Hinahamon tayo ni Papa Francisco na gugulin ang panahon ng Kuwaresma sa makabuluhan at mabungang paglalakbay, lalo na kapiling ang mga dukha ng Diyos.

Ang sinumang kumikila sa mga dukha ng punong-puno ng habag at awa at pagmamahal, gayun din kikilalanin din ng Diyos na nasa langit pagdating ng panahon.
Katekismo sa Taon ng mga Dukha (Fr. Dino Orolfo)

平成28年度宝山ホール自主文化事業
ミュージカル かいらぎ
「ヤジロウと海乱鬼 2016
風は、きっと、吹く」
1月7日（土）13:30 開場
14:00 開演

会場：宝山ホール
 脚本・演出・作曲 松永太郎
 鹿兒島純心女子中学・高等学校ダンス部出演
 全席指定 一般 2,000円
 高校生以下 1,000円
 （当日券は各500円増）
 ※未就学児童の入場・同伴はお断りします。

教区の基盤づくりに奔走

前教区長 パウロ糸永真一名誉司教帰天



強いリーダーシップで信者を牽引

枯れることのなかった宣教への熱意

前鹿兒島教区長・パウロ糸永真一名誉司教が2016年12月10日(土)16時54分、うつ血性心不全のため入院先の「天陽会 中央病院」(鹿兒島市泉町)で帰天した。88歳だった。糸永名誉司教の葬儀ミサと告別式は12月16日(金)午後2時から鹿兒島カテドラル・ザビエル記念聖堂でしめやかに執り行われ、36年もの間、強いリーダーシップで鹿兒島教区民を導いた前教区長との別れを大勢の信者が惜しんだ。

鹿兒島司教に叙階された。

1928年7月23日、戸市紐差町に生まれた糸永司教が司祭に叙階されたのは1952年9月14日のこと。場所は福岡サン・スルピス大神学院在学中に留学したモントリオール大学の神学院聖堂だった。

カナダから1953年に帰国した糸永司教は、長崎大司教区書記長、長崎純心短期大学講師(後に助教授)、長崎あけのほし幼稚園園長など歴任し、1962年に八幡町教会初代主任司祭となった。そして7年後の1969年の12月2日、教皇パウロ6世から鹿兒島司教の任命を受け、翌年1月18日、鹿兒島純心女子学園体育館での叙階式で

教区の基礎作り

教区長となった糸永司教が最初に取り組んだのは、司祭、修道者の召命を増やすこと。そして鹿兒島教区の宣教体制を検討するため、司牧評議会総会を設置し招聘した。そしてモントリオール大神学院の同窓生たちとクラスを「モントリオール」を選んで言葉「羊が命を受けるため」の実現のために、強いリーダーシップを発揮し、教区の基盤づくりに乗り出していった。

その糸永司教の足跡幾つか拾い上げると「教区司祭の養成を自分たちの手で」と訴え、鹿兒島教区一粒会を組織(1993年に神学生養成費制度に改組)。また一方では、経済的基盤のなかつた鹿兒島教区を自立させるために財政正常化にも取り組みながら、南九州小神学院を設置した(1987年)。

信徒の養成

2006年に引退するまで、精力的に教区内を巡回した司教だった。「教会堂が欲しい」という信徒の要望にこたえ、教区内各地で20を超える献堂を行った。また当時の教区では不可能とも思われたカテドラル再建計画を打ち出し、一度

を説き続けた。まさに熱い宣教魂を持ち、歩み続けた司教だった。

通夜と葬儀ミサ

12月10日に帰天した糸永司教との別れの式典は、司教総会との関係から14日の仮通夜から始まった。14日午後7時からの仮通夜は、糸永司教初の秘書を務めた泉浩二神父(総代理)が司式した。引退後も糸永司教の手助けをしていた泉神父は、秘書時代の思い出から、厳しい面を持っていた司教との親子のような温かいエピソードなどを紹介し、「天国から鹿兒島教区を見守って欲しい」と別れの言葉を述べた。

翌15日の通夜は郡山司教が司式。16日の葬儀ミサは全国から9人の司教と50人近い司祭が駆けつけ、450人余りの信者とともに鹿兒島を愛した糸永司教の永遠の安息のために祈りがささげられた。



「短信」

▼聖年閉幕ミサ

いつくしみの特別聖年の閉幕ミサが11月20日、ザビエル教会であった。ミサには150人の信徒が駆けつけ、郡山司教と13人の司祭とともに祈りをささげ、神

のいつくしみに感謝した。

▼市民クリスマス

恒例の鹿兒島市民クリスマスが12月11日、ザビエル教会で開かれた。今年の催しには、長崎教区から中村倫明神父(三浦町教会)が招かれ、「わたしを受け入れてくれますか(クリスマス)」をテーマに平和メッセージを送った。

会と催し (1月)

- 1日(日) 神の母聖マリア
- 4日(水) 世界平和の日
- 4日(水) ルカ神父命日(1998年)
- 5日(木) 七田八十吉神父命日(1980年)
- 5日(木) 聖体礼拝・カテドラル・6時30分
- 8日(日) ▼ピアンネ神学生助祭叙階式・韓国
- 8日(日) 主の公現
- 9日(月) 主の洗礼
- 10日(火) 教区司祭会・教区本部・17時
- 11日(水) 鹿兒島市主任司祭会・教区本部・15時
- 14日(土) 永島泰蔵神父命日(2002年)
- 15日(日) 年間第2主日
- 17日(火) ▼鴨池教会堅信式・9時
- 18日(水) 教区巡礼委員会・教区本部・19時
- 18日(水) キリスト教一致祈禱週間・25日まで
- 19日(木) 「すべての人を一つにしてください」という最後の晩さんでのイエスの祈りに耳を傾けるわたしたちはまた、折にふれて目に見える一致を示すように求められています。それは、ともに祈り、支え合うことによつて、神がすべての人の救いのためにイエスを遣わしたことを「世が信じるため」です(ヨハネ17・21、23参照)。
- 22日(日) キリスト教諸教会の間で毎年1月18日から25日に定められている一致祈禱週間は、このことを強く意識する機会となるでしょう。この一致祈禱週間のために、教皇庁キリスト教一致推進評議会と世界教会協議会は1968年以来、毎年テーマを決め、「礼拝式文」と「8日間のための聖書と祈り」を作成しています。日本ではカトリック中央協議会と日本キリスト教協議会が共同で翻訳し、小冊子を発行しています。
- 22日(日) ハイシク神父命日(1989年)
- 22日(日) 年間第3主日
- 23日(月) ▼キリスト教一致祈禱集会・谷山教会・14時
- 23日(月) ▼オリーブの会・教区本部・14時
- 23日(月) ▼司祭大会・指宿市・26日
- 23日(月) ▼司祭評議会
- 25日(水) 聖パウロの回心
- 26日(木) ▼郡山健次郎司教霊名
- 26日(木) ▼フェリエ神父命日(1919年)
- 27日(金) ▼コンベンツス
- 27日(金) ▼ステイプ神父叙階記念(1990年)
- 29日(日) ▼年間第4主日
- 29日(日) ▼世界子ども助け合いの日(旧カトリック児童福祉の日)(献金)

祈りの意向

【祈禱の使徒会】 宣 教 ・ キリスト者の一致 日本教会 ・ 世界平和への責任

諏訪勝郎神学生の信徒総代に聞く④ 教会活動活性化のために奮闘中

大熊小教区（浦上教会） 赤塚欽弥さん

信徒総代。―各小教区で司祭を支え、ともに信徒をまとめ、教会運営や年間行事等の教会活動の陰日な力持ちの心配る縁の下。鹿兒島教区に小教区は29あるが、普段は司祭に隠れて目立たない。彼らにスポットを当て、各小教区の現状や課題等について聞くシリーズの第4回は、大熊小教区（浦上教会）に取材した。

赤塚さんが総代を務めるのは二回目。これまで勤めが忙しかったが、一年前に離職。これを機会に二回目の総代職に。「自宅でもぶらぶらするよりも、教会に来ればやるのが何かある」。毎日、時間を見つけては教会を訪れ、草取りなどに精を出すという。

思い出と誇り

「子どもの頃も、中学校を卒業するまで毎日、教会に通った」。赤塚さんは1941年生まれ。「終戦時は4歳。1948年の台風で倒壊した古いお聖堂も覚えていた」と戦前に献堂された初代お聖堂の面影も記憶する。戦時中には軍に接収され青年学校だったところに、整然と小銃が並ぶさまも記憶に鮮明だ。

「叔母さんが看護婦をしようとつたから」、和光園には頻りに遊びに通った赤塚さん。松原がそこで生まれたハンセン病患者の赤ん坊を自ら引き取り、育てていたのを間近に見た。全国の療養所で唯一妊娠・出産・養育を可能とした、自らに身近な教会の業績を今も赤塚さんは誇りとする。

課題と試み

現在、浦上教会の信者数は約230人。しかし、主日のミサに集まるのは60人くらいという。「奄美でいちばん大きな敷地をもつ教会なのに」と赤塚さんはや

や寂しげ。その原因の一つが信者間の人間関係によるというの。赤塚さんの心を痛める。「一旦（教会を）離れた人は、なかなか戻ってこない」。

また少子高齢化は浦上教会でも深刻。現在、教会学校の子どもの数は4人。しかも「日曜日に子どもが一人しかいない」ということもある。クラブ活動、塾、習い事などのほか、近年増加した異宗教間での婚姻も影響していると思われる。「夫婦が共に信者でない」と、洗礼もない。教会に子どもを連れてくることもない。

こうした状況を鑑み、浦上教会では今年から始めた事業がある。「島の教会めぐり」。奄美大島の教会の所在を知り、その信仰の歴史に親しむのが目的。信者の子どものみならず、子ども自らが友だちに声をかけるなど、信者・未信者の別なく参加者を募集した。保護者を含め約40人が参加。大和浜、大圃、戸円と大和村にある三つの教会をめぐり、名音まで足を延ばした。その後、浦上教会でバーベキュー。最後は自然に八月踊りの輪が生まれ、盛り上がりつつある。

信者の力・教会の力

だがこうした新しい試み以上に、赤塚さんが期待を大とするところがある。教会の潜在力だ。昨年、お聖堂が台風のため屋根を損傷。これを機会に築32年となるお聖堂の修繕に着手、内装こそ業者に依頼したものの、外壁等は信者自らの手で賄った。

声をかければ、80歳を過ぎた高齢者もペンキ塗りなどに加勢。信者総出で、新築かと思まがうばかりのお聖堂に。さらに和光園、芦花部、大熊（司祭館）の外壁までも信者たちの手でペンキ塗装。この時ばかりは、「信者は凄いと感心した」と赤塚さん。「教会の力（パワー）を感じた」と言う。

加えて、浦上教会は毎年11月の第三日曜日に開く小教区のバザーで知られる。マリア会（婦人会）とヨゼフ会（壮年会）を中心に、竹箒など、手作りの物品も販売。小教区内外から、信者・未信者を問わず多くの

人が集まる地域の名物行事だ。その収益は、教会の火災保険や被災地支援の寄付金などに充てられている。

現在、75歳の赤塚さん。「あと15年は生きたい」。そして、「その間、教会は大丈夫」と請けあう。「皆がいるからね」。信者の力、教会の力に全幅の信頼と希望を抱く赤塚さんは、「頑張るよ」と笑った。

文芸

短歌

鴨池教会 前田 儀子

て吾れは旅ゆく
鹿兒島純心 川上 和
地の塩と使命を託すみ言葉を新たな年の
平和の塩に

シベリアより万羽の鶴の渡り来てふる里

俳句

輝き増す右近のクリスマス時を超え
鹿兒島純心 川上 和

公園の展望台より天草の島眺めつつ踏絵

めぐり来る降誕祭の光照る
吉野教会 徳永ノブ子

なる歴史を秘めし往時想へり

人まばらミサえと急ぐ冬の朝
吉野教会 徳永ノブ子

車窓より外の景色眺めつつ九州新幹線に

お祝いのひざかけぬくし早十二月



「終戦間もない頃、奄美大島に限らず、日本中が食糧難にあつた。教会に行けば何か食べられた」と赤塚さん。教会では、チョコレートなどが配られたという。また菓子類に限らず、遊具も。「学校にもないグローブやバットが教会にはあった」。だから、「遊び場はいつも教会だった」。

11月20日（日）16時から大熊小教区の浦上教会で「いつくしみの特別聖年」の閉幕ミサがささげられ、奄美大島地区の五つの小教区の保育園児から高校生までとその保護者たちが参列した。

いつくしみの聖年 閉幕子どもミサに参列して

大島地区青年部 会長 星村文乃

この日のミサは貴島神父が主司式、それに永山神父、久保神父、ティエン神父が共同司式し、26人もの男女の子どもたちが侍者として仕えた。またこの日のミサでは、高校生2人と信者の皆さんによる合奏によ

る「アーメンハレルヤ」など馴染みの聖歌が歌われ、また朗読も奉納も子どもたちが担当した。奉納の品は本物の魚や奄美の特産物パイナップルなど。演出もとても楽しいものだった。

17時30分からは隣接する「マリア館」で信徒の方々が準備してくれた鶏飯での会食。約200人が集い、高校生が中心の出し物で盛り上がった。実はこのミサ、野外で行い、キャンプ

ファイヤーする予定だったが、生憎の雨のため予定変更されたのだ。参加した子ども達からは「キャンプファイヤーをしたかった」との声が上がった。思えば、私たちが中学生の時には、キャンプや高校生を青年を中心に燃えていたように思う。所属教会や年齢差を超えて多くの男女と分かち合うことができ、それが今、自分の信仰生活の基礎となっているように思う。